

各紙誌の視点で見る福島県磐梯町の「デジ田」

乗り合いタクシーにAI

町民の新たな足、観光客にも

この秋、福島県喜望峯町は町運営の予約型乗り合いタクシーにＡ１（入土知能）を導入し、町民の新たな足として再スタートさせた。利用者の組み合わせや走行経路が自動で最適化され、併せて、乗降りできる地点を増やしたことで利用数を伸ばしている。これまで町民限定だったが、観光客など来訪者にも開放した。

年末年始（12月29日～1月3日）を除き、毎日午前8時～午後5時に運行。予約は2週間前までできる。運賃は町民一般が3,000円、来訪者が千円。町内エリアを中心部の「Ａ」と、星野リゾートのホテルがある「Ｂ」に分け、エリアをまたぐ移動の場合は1,000円が加算される。

「午前中、高齢の町民の利用

みちのグループ（東京）の会津県白田町（会津八木）、福島県会津若松市・佐藤俊巳社長が町の委託を受け、トヨタ・プリウスを3台走らせている。採用するA相乗りシステムは米Via（ヴァ）製。

利用者に事前に、氏名、電話番号、生年月日などを登録する。乗車する際は、専用のアプリか電話で乗降の降りる場所と人数を伝える。停留所のある乗降地点として、役場や学校、商業施設など22カ所が設置されているが、デマンド（需要応答）方式のため、自宅、畑などどこからでも乗れる。旧来のタイプは停留所と自宅に限られていた。

町の人口は昨年6月末時点で33,079人。A1相乗りは1日当たり約6乗車、人数は、多い日で60人ほどに上る。日本百名山の磐梯山は登山客、スキー客に人気のスポットで、期待がかかっている。

渡邊氏は「今年度は、旧来型の利用者に迷惑をかけることなくに置き置いてみる。新型へしっかりと移行してもらおう。乗車

寺院の復元、塗装で鮮やか インフラの持続が不可欠

福島県会津盆地北東部に位置する磐梯町。同町を代表する寺として慧日寺がある。この寺は平安時代の初期に南都法相宗の高僧である徳一菩薩によって開かれた。東北地方では開基が明らかな寺院としては最古のものという。

広大な寺跡は昭和45年に国の史跡に指定され、復元整備が進

金盞の復元は、町おこしのシンボルとして、平成17年に正式決定し、同年本着工した。完成した盞の外観を彩るのは鮮やかな赤色、赤は一般に魔よけの意味があり、あるに役立っているが、木材の腐食防止や防虫対策にも大きな役割を果たしている。復元した金盞では、わが国で古くから使用されてきた赤色顔料であるベンガラを用いていいる。これら顔料を膠で溶いて塗布されるのが古来の一般的な方法。しかし、長い年月の間には色や塗膜の剥落が発生する。

今回、復元したことは耐候性塗料の採用を検討。その結果、退色や管理面の配慮から、頭、肩、腕の部分は耐候性塗料を用い、頭蓋の上位は従来の膠仕様で塗布する様様は決定した。

史跡慈日寺跡の整備事業では、金盞復元工程は続き、平成19年度の工事をかけて中門の復元工事も取り組んだ。古来からの建物として、不動院が配置されているが、今後は維持するための改修も必要になると考えられる。

新たなシンボルには、近代的

な商業施設として、平成21年オ
ーブンの道の駅ばんだいが挙げ
られる。平成21年7月31日に道の
駅に登録、同年8月16日に福
島県19番目の道の駅としてオ
ーブンした。「徳一の里」さら
り2が愛称の同駅は敷地面積が
約9000平方メートル。町内の経済
活性化につながっているとのこと
だ。

◇

磐梯町では令和5年3月に、
町の上位計画である「総合計画
の後継地域計画」を公表した。
インフラ関係を見てみると、
道路関係は「町道整備のほか、
舗装・橋梁の長寿命化・修繕計画
に基づいた交通インフラの整備
を推進する」と同町の橋梁（4橋）
の修繕は令和4年度の点検結
果により97%、令和8年には
100%を目指す。

生活関係では、同町の上水道
の普及率は99.4%と高く、ほ
ぼ全域が整備されている。し
ながら、

近くには慧日寺の歴史を
つた寺跡は、「慧日寺跡」
で古刹。明治初めに廃寺
て国指定の史跡となってい
現在町による史跡整備が進
れており、発掘調査の結果
として2008年に金堂、翌
に中門の建物が発見され、
津仏教文化発祥の地」とし
えた庄の姿を今に伝え
る。

史跡、スキー、名水の町

磐梯町の観光名所の一つ、慧
た「磐梯山慧日寺資料館」、古
日寺（えにちじ）は、平安時代
民家を改装した観光案内所兼力
の名僧「徳一（とくいち）」に
フェ「庄九郎亭」が整備されて
よって建立された寺院で、一平
いる。

藤哲主 主

近年は慧日寺の歴史を記した古跡。明治初めに廃寺となった寺跡。「慧日寺跡」として国指定の史跡となっている。現在町による史跡整備が進められており、発掘調査の結果をもとに2008年に金賞、翌09年に中間の建物が発見され、「会津仏教文化発祥の地」として栄えた往年の姿を今に伝えている。

近頃は慧日寺の歴史を記した古跡。明治初めに廃寺となった寺跡。「慧日寺跡」として国指定の史跡となっている。現在町による史跡整備が進められており、発掘調査の結果をもとに2008年に金賞、翌09年に中間の建物が発見され、「会津仏教文化発祥の地」として栄えた往年の姿を今に伝えている。

「この地域の魅を発信」、コ帯に飲料水として配水される清らかな滝が点在する「名湯」の町」として知られる。磐梯山麓の「磐梯西山麓湧水群」は、古代から干ばつ対策の一環として開削された大規模な雨ごいの儀式で活用されてきた。湧水群の地下水は町の全人口に飲料水として配水される

かし、一部の未給水区域の解消と併せ、水需要が減少している状況であるものの、管路を含め老朽化した施設、設備を更に更新していく必要があるという。

災害対策では、想定される自然災害リスクとして「地震災害」「大雨・土砂災害」「火山災害」「雪害」を挙げる。国土強靱化基本計画と福島県国土強靱化地域計画との調和を図り、「備えるべき目標」として「八つの目標を設定し、その妨げになるものとして、24項目の起きてはならない最悪の事態」を同一の特性を踏まえたものとして設定している。

インフラ関連を見るに、起きてはならない最悪の事態として、「上下水道等の

長期間にわたる機能停止」「道路の分断等による交通ネットワーク機能の停止」を想定している。

インフラの日常における維持・管理は、災害発生に備える意味でも重要なこと。限られた予算の中で、老朽化を食い止める機能を保つための補修塗装など、持続し続けられるインフラの実現が不可欠である。

（資料提供）



史跡慧日寺跡の再建された金堂



史跡慧日寺跡の再建された金堂



会津バスが運行するA1相乗りタクシー。後方はJR磐越西線・磐梯町駅(10月1日)

担い手の確保・育成へ

町産農産物のブランド化も

会津盆地の北東部に位置し、鷲峰山を間近に仰ぎ見る山紫水明の地に位置する鷲峰町。豊かな自然から生まれた豊富な肥た大地と清らかな水を利用したおいしい農産物の宝庫だ。耕地の大部分は中山間地域で水稲を基幹作物として、東部では露地野菜、アスパラガスやネギ、施設野菜（生食トマト、アスパラガス）、葉巻野菜（ほうれん草）、花き（リンドウ等）、^{きんぎょ}、園芸類など、西部では、果樹（りんご・ブドウ等）が生産されており、町の基幹産業の一つとなっている。

一方、同町農業においては、農業経営体数の減と農地の保全・有効利用、需要に応じた米づくりや地域の特産を生かした産地づくりなどが課題となっている。

こうした中、町では、令和2年3月に総合計画（策定、それに基づきさまざまな取り組みを進めている）。

計画では町の農業振興の中核となる担い手を確保、育成し、農業および農村環境の保全を図りながら、農業経営者の移行と農業生産法人等の企画的農業経営の整備に取り組みとしてしている。青年就農、農業後継者へ

の支援に対し、就農初期段階の新規就業者（就農時の年齢50歳未満）に対し、就農意欲の喚起と就農後の定着化を支援する。また、年齢を問わず兼業から専業農家へ移行する農業者後継者等に対し、就農意欲の喚起と就農後の定着化を支援する。

農地については、農地中間管理機構への農地集積の促進や耕作放棄地・遊休農地対策を推進し、有効利用を図る。具体的な取り組みとしては、日本型直接支払制度の活用や、農地プランの実質化（現行制度の地域計画の策定）などに取り組む。

髣髴町で特に力を入れて取り

全型農業にこだわったSDGsな生産が行われている農産物。町では、2018年から豊かな自然を未来へつなげることを目的として、土づくり等を通して農薬、化学肥料の使用を低減し、環境負荷を少なくする。環境保衛局と農業の推進をスタート。町の自然環境に適した栽培方法を確立するために、科学的・理論的に証明可能な株式会社「バイオファーム」の栽培技術「Bio Logic Farming（生態調和型農業）」

か、かんがし用水に利用。髷髷のは若者へのアピールだ。ばんげ山、山慧日寺資料館の庭園も引水され、給水に来る自然愛好家就労体験×R×戦略×バケジヨンで創出する第2のふるさと」が22年、観光庁が進める「第2のふるさとづくりプロジェクト」のモラル実証実験に採択され、農家の就労体験と宿舎提供、農家の就労体験と宿舎提供、休養と土産採掘、観光拠点の泊、交通がセトになった旅行で100万人が利用する人気のた。

と連携した、この課題の解決を考えるフィールドワーク町内に場があるカメラリスのメカロシグマ」とタネっつた町歩きと撮影のイベントフォトウォークなど、の「愛着口」を拡大させるへの事業に精力的に取り組んでいる。

（観光経済新聞）

試験栽培を2016年に開始。年間試験栽培結果を経て、安定した技術の習得により農産物生産が可能となり、2021年にはブランド商品第1弾としてトマトの販売がスタートした。

「BLOF理論」は、作物本来の力を取り戻す農法であり、土を「感じる」「硝酸態窒素」が減少し、「抗酸化力」「ビタミンC」「糖度」が高まるとされている。



目標掲げている。

この基本計画を踏まえ、今年4月に「移住・定住推進戦略会議」を立ち上げ、住宅政策を中心にソフト・ハードの両面から移住・定住を推進するための計画について、町役場の複数の部署の連携のもと議論、検討を進めている。

ソフト面では、移住者、町民それぞれへの情報発信や理解の醸成などに取り組む。移住する側と受け入れる側のミスマッチにより移住がうまくいかないケースがあることから、「移住希望者」に地域での暮らしの細かな情報が見えるようにする。また、町民の気持ちなども十分に汲み取り、移住推進に取り組むことが重要としているためだ。

一方、ハード面の取り組みは、住宅の確保が大きなテーマ。同町は以前から充実した子育て支援策を展開しており、移住希望者も多い。しかし、町内に住宅

が少ないことから、その充実を図ることが大きな課題になっている。

住宅政策としては、既存の町営住宅約100戸の長寿命化を図る。住宅が足りない中、維持管理をしっかり行い長持ちさせることでペースとなる公営住宅をしっかりと確保する。加えて、空き家対策を進めることで、

町への移住・定住ハードとソフト

町への移住・定住に注力

ハードとソフト両面から

既存住宅の流通額を増やす。令和元年に空き家バンクを創設した宮城県は、この流れに乗じて、今年度の概算でついで、民間の不動産事業者等もほぼ流通が広がる状況が情報があつて、空家の空き家バンク展開を行い、空き家をつなげる仕組みについて所有者がアローナード。また、昨年度には空き家活用を目的に、解体改装、相続登記、家財道具員の処理といった補助を開始した。現在、空き家バンクへの登録は88件と増加、解体に対する補助も今年度のみで4件の活用があるものと、徐々ストック住宅の流動化につながり始めている。

民間賃貸住宅の誘致を進める。2年前から集居型賃貸住宅の建設に対して60万円／戸の補助費をスタート、1棟のアパート建設の実績につながっている。

また、移住希望者を対象とする「お試し住宅」の検討も進められている。同町は6年ほど前に空き家を借り上げ、高齢者などに空き家を借りたい、移住したいという手で行う「お試し」で「未だ自らの手でリフォームし」「未だ非常と命名、空き家に関する相談を気軽にできる」といふように、1階に窓を開閉している。今年3月、「この「未だ借」の2階において」、「お試し住宅」のニーズを測ることを目的に、3組の移住希望者が宿泊してもらう実証実験を行った。現在、この結果をもとに議論、検討を進めている。

(ハ)ウツシヤ・ブ・ト・ノ・コ・ノ・コ・ノ・コ

の駅ばんだいの農産物販売コーナーや町内会のスーパーで販売しているほか、ふるさと納税の返礼品としても活用。また、子もたちに地産地消で安全な作物を食べてもらうため、学校給食にも積極的に活用している。

令和5年11月時点で「豊梯さ」とやまの慧み」は8品目、13人の生産者が生産している。

（農村ニュース）

る。そのため、従来作物より栄養価が高く、作物本来のうまみを感じることが期待される。事実、一「磐梯さとやまの慧」の作物は日本有機農業普及協会が主催する栄養価コンテストで2020年と2021年はトマトが、2022年はリンゴが、2023年はサツマイモがそれぞれ最優秀賞を受賞している。



「磐梯さとやまの慧み」に取り組む生産者